

弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷子でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分っても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者

の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛けぬき 穴から鑷子で脂あぶらをとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎くきのような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻なと大した変りはな

い。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくる鏡きまを、極りが悪るそうにおずおず覗のぞいて見た。

鼻は——あの顎あごの下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘うそのように萎縮わすかして、今は僅わずかに上唇さんぜんの上で意気地なく残喘ざんぜんを保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏あとまれた時の痕

であろう。こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりほずぎょうしないかと云う不安があった。そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫ぎょうぎでて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、ほほけきょうけきょう法華経書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

Read by Yumi Boutwell 6-5-08

Text from [http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42\\_15228.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房 1986（昭和61）年9月24日第1刷発行 1997（平成9）年4月15日第14刷発行 底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房 1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月 入力：平山誠、野口英司 校正：もりみつじゅんじ 1997年11月4日公開 2004年3月7日修正 青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。